

【作物】

1 早期水稲の管理

- (1) 水管理について
 - ア 中干し直後：2～3回走り水を行った後に、間断灌水を行います。
 - イ 幼穂形成期～穂ばらみ期：土壌水分が不足すると収量や品質が低下するので、水分を十分保ちます。
 - ウ 出穂期～出穂期以降：浅水管理（2～3cm）をします。異常高温が続く場合は、かけ流し灌水で地温を下げ、根傷みを防ぎます。
 - エ 登熟期：灌水して土壌に水分を与えたら、水は溜めずに、足跡に水がたまっている程度（飽水状態）にします。
 - オ 落水期：落水期は収穫前7日程度としますが、収穫作業に支障のない程度に刈り取り直前まで走り水灌水で土壌水分を保ちます。
- (2) 病虫害防除

防除時期	病虫害名	農薬名 濃度 使用時期
出穂期前	紋枯病	バリダシン液剤5 1,000倍、収穫14日前まで
穂揃期～傾穂期	カメムシ類 (ウカ類、ツマグロコバエにも有効)	スタークル顆粒水溶剤 2,000倍、収穫7日前まで

- (3) 倒伏軽減対策（徒長等で草丈が伸びすぎ、倒伏の危険性がある場合）
 - 薬剤名：ビピフルフロアブル
 - 使用時期：出穂7～2日前（使用時期厳守）
 - 使用量：10a当たり75～100mlを水100～150lに希釈して散布。
 - 注意点：ムラのないよう均一散布し、多量散布や重複散布は絶対に行わないで下さい。

2 普通期水稲の管理

- (1) 中間追肥
 - 根の活力を高めるため、出穂40日前頃に、PK30化成を20kg/10a施用して下さい。
- (2) 水管理(中干し)
 - 必要茎数（約18～20本）が確保され次第、足跡が軽くつく程度に行います。中干しの目安は約7～10日間で、圃場により土の乾き具合が異なるため、土壌条件に応じて連続または間断での中干しをして下さい。
- (3) 病虫害防除
 - 田植時に「フルターボ箱粒剤」を使用した場合は、出穂期まで防除効果が期待できますが、水稲の生育状況や病虫害の発生状態をよく観察して病虫害防除を行って下さい。

<真鍋>

【野菜】

1 サトイモ

- 4月の天候不良により植付けが遅れたため、全体的に生育が遅れています。
- (1) 灌水
 - 梅雨明け後、高温が続く場合は、葉焼けの発生に十分に注意して下さい。灌水は日中を避け、地温の低下した夕方に短期間で行って下さい。
- (2) 施肥
 - おおなか作業を行った化成体系の里芋は、おおなか1ヶ月後を目安にしてしあわせ化成を40kg/10aを施用します。
- (3) 病虫害防除
 - ハダニは、高温乾燥が続くと発生します。一旦増殖すると防除が困難になりますので、初期防除に心がけて下さい。7月中～下旬をめどに、発生状況を確認し、コロマイト乳剤1,000倍等を散布します。
 - 展着剤まくびか5,000倍を混用すると薬剤の付着が良く、効果が高まります。

2 ヤマノイモ

- (1) 施肥
 - 肥料吸収は、7月上旬から始まり8月に最大となります。JAの施肥設計を参考にして追肥して下さい。
 - 油粕200kg/10aまたは、菌根甘120kg/10aを施用して下さい。
 - 最終追肥は8月上旬には終えて下さい。
- (2) 病虫害防除
 - ア コガネムシ類幼虫
 - 例年、7月後半から幼虫が発生します。被害が多い圃場は7月下旬～8月上旬にバイジット粒剤を9kg/10a散布します。
 - イ ハダニ類

防除時期	農薬名	濃度	使用時期/使用回数
7/上～中	コテツフロアブル	2,000倍	収穫前日まで/2回
7/下～8/上	コロマイト乳剤	1,000倍	30日/5回

発生初期、葉裏中心に散布を心がけて下さい。

ウ シロイチモンジヨトウ

防除時期	農薬名	濃度	使用時期/使用回数
7/下～8/上	デルフィン顆粒水和剤	1,000倍	発生初期(ただし収穫前日まで)/4回

エ 炭そ病

防除時期	農薬名	濃度	使用時期/使用回数
7/上～中	シトラーフロアブル	1,000倍	収穫前日まで/2回
7/下～8/上	ペンコゼブ水和剤	600倍	21日/4回

多湿条件下（特に夕立、台風時の雨）で発生が多くなるため、降雨直後に防除を行います。

保護作用が中心の剤ですので、降雨前の散布が効果的です。

<越智>

【果樹】

1 温州みかんの摘果

- 樹の状態に応じた着果管理を進めて、M玉果を中心とする高品質果実づくりに努めて下さい。
- (1) 着果過多樹
 - 結果母枝を確保するため、早急に、樹冠上部を中心に樹冠の1/3を摘果して夏梢を発生させます。
 - ※発生した夏芽は、ミカンハモグリガ（エカキムシ）に注意。
- (2) 着果不足樹
 - あら摘果は、果実が旺盛に肥大しやすいので、控えるか見合わせて、主に仕上げ摘果で結果量を調整します。また、果実に光を当てて充実させるために、かぶさり枝を除去して下さい。
- (3) 着果、新梢ともに多い連年生産樹
 - 品質向上のため、摘果の重点は9月以降として下さい。

2 中晩柑類の摘果

- あら摘果は、大玉生産に向け初期肥大を促すため、生理落果終了後すぐに始めます。翌年の結果母枝確保にも配慮しながら、有果果主体に結実させます。
- 主枝先端部や直花果、内・スソ成り果実、奇形果、傷果、小玉果などを摘果していき、8月中下旬に葉果比100程度に仕上げるよう計画的に作業を進めましょう。
- あわせて、肥大と減酸を促すため、雨が少ない場合には適宜灌水して下さい。

3 病虫害防除

- 黒点病の薬剤散布間隔は、前回散布後の累積降水量200～250mmまたは30日です。本病に弱い品種は散布間隔を短くし、最も弱い「せとか」は累積降水量180mmまたは25日を目安にして下さい。
- そのほか、ダニ類、カミキリムシなどの防除を行います。

<大西>

【花き・花木】

1 シキミの管理

- 夏期は害虫の発生期です。お盆の需要期に向け防除を徹底して下さい。
- (1) フシダニ
 - 4～9月にかけて、成幼虫が展開直後の柔らかい新葉や新梢を吸汁し、ウイルス病的な輪紋症状やモザイク症状になります。体長0.1～0.3mm、淡黄色～橙色で群生します。
- (2) 黒しみ斑点病
 - 収穫した切り枝を水につけると、葉に黒いしみ状の斑点がみられます。主に降雨時期（5～7月）にかけて胞子の飛散量が多く、感染がおこると考えられます。
- (3) 病虫害防除
 - 定期防除として6月下旬～7月上旬に、殺菌剤のベンレート水和剤2,000倍、殺虫剤のオルトラン水和剤1,000倍、ダニ剤のピラニカEW1,000倍を混用散布して下さい。
 - 防除は、高温時を避けて涼しい時間帯に行ってください。薬剤は葉裏にかかるよう、ていねいに散布して下さい。

2 シンテッポウユリの管理

- (1) 病害防除
 - 最も注意する病害は「葉枯病」で、病原菌は糸状菌（カビ）の一種です。長雨が続きような湿潤な条件下で多発します。
 - ダコニール1000（1,000倍）、トップジンM水和剤1,500倍を降雨の度に散布します。梅雨明け後は、葉に汚れが残りにくいフルビカフロアブル2,000倍を散布します。
 - また、防除時期が高温期となるため、温度の下がった夕方に防除を行います。
- (2) 葉焼け・倒伏の防止
 - 梅雨明け後の高温となる時期には、土壌水分が不足すると葉先が焼けたり、切り花長が短くなるなど品質が低下します。畝間が乾いてひび割れしないうちに、畝間灌水を行います。また、強風対策として、生育の早いものを基準とし、遅れないように順次フラワーネットを上げ、倒伏を防止します。

<日野>

【畜産】暑熱対策

- 7月は暑熱により体温が上昇し、生産性や繁殖性が低下したり、熱射病の症状を呈したりします。畜舎環境と飼養管理を組み合わせ暑熱対策を行いましょう。
- (1) 断熱・遮光
 - 暑熱対策の基本となるのが断熱です。遮光ネットや日陰植物の設置、屋根への断熱塗料や断熱剤の施工は畜舎内への輻射熱を抑える効果が高くなります。地下水や湧水など水が豊富なところでは屋根へのスプリンクラーの設置が効果的です。
- (2) 送風
 - 送風機を用いて、畜体に直接風を当てると防暑効果が高まります。併せて細霧装置等を組み合わせるとより効果的です。
- (3) 飼料・水の給与
 - 飼槽を清潔に保ち飼料の変敗を防ぎます。給水器を頻りに清掃し、新鮮な水を十分に飲めるようにします。飼料給与を比較的涼しい朝・夜にずらすとともに、給与回数を増やし飼料摂取量の維持に努めましょう。また必要に応じてミネラルやビタミン製剤を給与します。
- (4) その他
 - 家畜そのものが熱源となるため、群飼する肥育牛、肥育豚、肉用鶏は飼育密度を下げてみるのもよいでしょう。牛の毛刈りはこまめに行うと蒸散が促進し、送風の効果を高めることができます。

<中谷>